

第48回全国セラミック教育研究大会 研究発表

人と人との絆を大切にし、継承されていく恵みに感謝する

—本校セラミック科10年の取組とその成果を振り返って—

滋賀県立信楽高等学校 瀧下 広幸

1・はじめに（信楽焼の歴史と本校の変遷）

日本六古窯のひとつに挙げられ、天平14年（742年）、聖武天皇の紫香楽宮造営にあたり、瓦が焼かれたのが発祥です。



「工藝志料」によると信楽の開窯は弘安年間（1278-87年）「北条時宗、貞時時代」と記されており、鎌倉時代中期から窯業によって本格的陶器が焼かれるようになり、室町・桃山時代には、茶道の発展とともに茶器の生産も盛んになりました。江戸時代には登り窯が登場し大物陶器が焼かれ、水壺やミソ壺、日用品などが多く生産されました。

●紫香楽宮跡出土「瓦」

信楽のみならず各地の窯場では、それまでの窯に代わり効率の良い登り窯を取り入れることになります。信楽もその例外ではなく、17世紀に入ると窯はなくなり登り窯に移り変わっていきました。その後、窯は信楽では見られなくなり、昭和40年頃からその復活が始まりました。

明治時代になると、酒器、神仏具などの小物も焼かれ、火鉢の生産は昭和30年頃まで主力製品（日本国内のシェアは約80%位）として全国に供給されました。

本校は昭和26年、県立甲賀高校分校（定時制）として開学、翌27年、再編により県立甲南高校信楽分校（定時制）、同33年、全日制工業課程窯業科に改編、同48年、信楽工業高等学校として独立、窯業科2学級、デザイン科1学級、同57年、窯業科1学級減、普通科1学級新設となり、校名変更し三科をもった特色ある後継者育成と産業発展の大きな期待を抱いて信楽高等学校として新たに誕生しました。昭和62年、窯業科をセラミック科に科名変更し、ファインセラミックスの製造分野にも力を入れた、伝統工芸と先端技術を学べる魅力ある学校へと発展をとげました。地域産業の要望に答えるためセラミックス関係の学習内容も幅広く取り組めるよう環境を整えました。



●火鉢生産(機械口クロ)



●校舎

平成23年7月、魅力と活力ある県立学校づくりに向け、生徒の興味・関心や進路希望等に応じた教育を提供し、魅力ある教育を展開するとともに、多様な選択科目の開設をはじめ、部活動や学校行事などの集団活動の活性化、施設や設備の効果的・効率的な利用等の観点から学校活力の維持向上を図ることを目的として、高校再編実施計画（案）が出されました。

本校もその再編にあたりましたが、同窓会、地元住民、地場産業界の皆様の活動もあり、分校となることは回避できました。

今後は、より魅力ある教育を展開するため、地場産業界や専門施設などと連携を高め、新しい信楽高校として生まれ変わることになります。

2・信楽高校ワークショップ

◆ 内 容

平成17年度から6カ年に渡って取り組んだ「信楽高校ワークショップ」は信楽で伝統的なやきものを制作している陶芸家のグループ、陶芸作家協会会員並びに、陶芸の森の国内外のスタジオ・アーティストの方々ともに、毎年、本校生とフリーランスキューレターの岩田一也氏が設定したテーマをもとにコラボレーションをしました。また、伝統技術を継承するため窯窯（紫雲窯）での焼成を行いました。窯窯焼成は焼き締めの他、釉薬モノについて地元作家、澤 清嗣氏より窯詰め方法、焼成技術を教えていただきながらの実施でした。このほか窯窯焼成については、滋賀県窯業技術試験場の研究生を対象として伝統技術の一端を経験していただき、一方形態の考え方と成形技法、釉薬の技法を活用した作品づくりについて奥田博士氏や谷野明夫氏、海外アーティストからスライドによるレクチャーを実施していただきました。

●「絆」(2008年度)



●ワークショップの様子（海外アーティストからの制作指導）



◆ 開催テーマ

2005年度「友情への架け橋」、2006年度「自然との対話」、2007年度「遊び」、2008年度「絆」、2009年度「語らい」、2010年度「自然」のテーマで開催しました。

2006年度には、学校の空間を生かしたオープン型「やきもののミュージアム」にしようという計画が、セラミック科生徒代表の洞 康子さん（当時2年）によって「信楽高校ミュージアム化宣言」が宣言されました。



●「遊び」(2007年度)

●制作作品（部分）

●洞 康子さん

◆ 会 期

毎年7月第4週（夏季休業中）の3日間、AM9:00～PM4:00にて実施。

焼成（窯窯）は8月第4週の5日間で行いました。

◆ 参 加 作 家

荒川 智・荒田次郎・安藤久仁子・岩田一也・上田健次・大西左朗・奥田博士・奥田美恵子・川崎琢介・神崎継春・神山直彦・小谷日比呂・小牧文子・小牧鉄平・澤 清嗣・角田新蔵・高橋政男・橘功一郎・谷野明夫・徳地祐二・西尾隆臣・西 周・廣川みのり・廣田忠美・藤原 純・宮田良治・八木橋昇・山田浩之、以上28名（いずれも信楽陶芸作家協会会員）

青木邦仁（日本）・Amy Jo Gellber（アメリカ）・井崎智子（日本）・内田京子（日本）・近江綾乃（アメリカ）・Galina Manikova（ルーマニア）・小原真理（日本）・金 明柱（フランス）・嚴 恵蕙（中華人民共和国・香港）・崔 聰子（大韓民国）・車 花淑（大韓民国）・除 美月（中華人民共和国・台湾）・Tania Sippilla（フィンランド）・Denise Suska Green（アメリカ）・Nancy Elizabeth Fuller（イギリス）・Nel Bannier（オランダ）、以上 16 名（いずれも陶芸の森スタジオアーチスト）

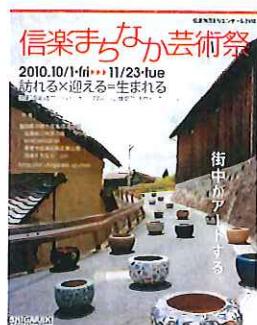
合計 44 名（延べ 53 名）の方々が学生と語り合いながら、成形技術や発想方法を熱心にご指導いただきました。

3・信楽まちなか芸術祭（信楽陶芸トリエンナーレ）

◆ 内 容

信楽の持つ独自の風土、景観などの資源を再発掘し、磨きあげ、命を吹き込み、「歩いて楽しい観光まちづくり」と「アーティストを育てる信楽の環境づくり」に市民と地域が一体となって取り組み、信楽焼の振興を目指すことを趣旨に開催されました。

本校はワークショップの取り組みが評価され、トリアンナーレの基本戦略の一端を担い、芸術祭に参加しました。



●公式ポスター



●制作作品（部分）

- 「信楽高等学校ワークショップ展～信楽高等学校×信楽陶芸作家協会～」を信楽町のランドマークである新宮神社で“野外陶彫展”を行いました。来訪者も 2500 人を超えて、生徒の活気ある作品に出会っていただくことが出来ました。

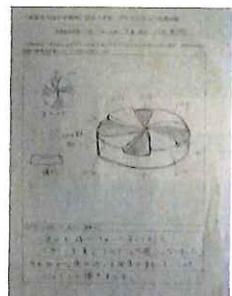
◆ 開催テーマ「自然」

◆ 会 期 平成 22 年 10 月 5 日（火）～11 月 5 日（金）

- 「土灯りの散歩道展」信楽で活動する作家を対象に、信楽窯業技術試験場が新たに開発した透光性陶土（信楽透器）を使い“あかり”をテーマとした公募企画展。この公募展覧会場を訪れた来訪者に展覧会アンケートを答えてもらい、その記念品として抽選で 500 名に透光性陶土を使用した「携帯ストラップ」を配布されました。この展覧会企画に基づき、本校デザイン科生徒がストラップメダルのデザインに取り組み、選考された 5 点を、セラミック科生徒が制作しました。このことで透光性陶土のアピールと、信楽工業技術試験場及び信楽高等学校の周知にも大変有意義な展覧会でした。

●ストラップデザイン（上）

●携帯ストラップ（下）



4・社会人聴講生

◆ 内 容

平成 18 年度から陶芸における生涯教育の充実、生徒との交流によるキャリア教育の一環を目的に、広く一般に社会人聴講生を募集しています。募集人数は 6 名ですが、応募者は平均 3 倍あり人気の高い事業の一つです。応募資格は、一年間を通じて当該科目に意欲的に取り組める人。面接を行い意欲・適性を判

断し選考をしています。聽講費用は、県の条例により 1 単位当たり、4,810 円、
4,810 円×3 単位=14,430 円（年間）必要になります。別に材料費 3,000 円、保
険料 500 円、合計 17,930 円（年間）を納めてもらっています。実習内容は、
釉薬基礎・手ひねり成形基礎・ロクロ成形基礎を 2 年生と共に学んでもらって
います。修了等の認定は、単位の認定は行っていませんが、出席状況や実習・
レポートなどの取組状況を勘案して、成果が満足であると認められる場合は、
修了書を交付しています。



●社会人聽講生実習風景

5・社会人講師招聘

◆ 内 容

伝統工芸技法の継承を目的とし、3 年生の課題研究を中心に平成 15 年度より毎年招聘しています。
伝統工芸技術の実演をしていただき、その後実技に展開して直接各自が行っている制作へのアド
バイスや制作のポイント、制作に関する注意事項を楽しく、熱心に、時には雑談も交えて技術の継
承をしていただいている。奥田英行[英山]氏は、実演前に自ら制作された“茶碗”で抹茶をたて
られ「茶道」を生徒たちと一緒に楽しめながら、「用の美」の大切さと掌（たなごころ）で感じる
やきものの魅力を語られてから実技に入られました。

多彩な技術で生徒たちの注文にこころよく応えられ、丁寧に、
面白く教えられます。小西啓吾[紫香]氏は、生徒からの招聘リ
クエストが一番多い方です。

今年招聘させていただいた、松本 修[信斎]氏の息をのむ技術には、生徒たちも釘付けになり 1 時間の実演中静まり返った
実習室にロクロの回転音だけが響いていました。



●小西啓吾[紫香]氏



●松本 修[信斎]氏

◆ 招聘講師

故 田中庄平[香雲峰]（下絵付）・大原 薫（下絵付・イッチ
ン）・奥田英行[英山]（手ひねり成形）・小西啓吾[紫香]（小
物ロクロ）・松本 修[信斎]（大物ロクロ）の 5 氏（いずれも
信楽焼伝統工芸士）および、能勢 進（上絵付）・谷野明夫（小
物ロクロ：磁器）の 2 氏（いずれも作家）の合計 7 氏（延べ
10 氏）

◆ 招聘時期

6 月上旬または、9 月初旬の課題研究（3 年）・実習（2 年）に 3 回（3 時間×3 日）で実施。

6・長浜盆梅展

◆ 内 容

盆梅とは鉢植えの梅、梅の盆栽のことです。中には 2 メートル以上の巨木や
樹齢 400 年を超す古木など、300 鉢の中から開花時期にあわせて見頃の盆梅を
展示します。近年、各地で数多くの盆梅展が開催されていますが、「長浜盆梅展」
は昭和 27 年から始まり、今年で 61 回目を迎えられます。慶雲館という純和風
会場の座敷に巨木や古木がずらりと並べられます。毎年 1 月 10 日から 2 ヶ月
間、新春の風物詩として開催しておられ、歴史・規模ともに「日本一の盆梅展」
として愛されています。

盆梅展とのコラボレーションは今年で 2 年目になりますが、“用の美”とし



ての盆鉢の制作に生徒たちは戸惑いながらも、あふれる感性で作り上げています。大きさは、信楽焼の特徴でもある大物（2尺以上）を中心として、小鉢（1尺以下）のものを出展しています。

変わったものでは、一つの鉢を3分割して情景をドラマチックに演出したものや、散った花びらを浮かべて展示する水盤、盆栽の形を整えるために切り落とした枝をいける水鉢などがあり、どれも生徒たちのアイディアで生まれた新しい盆栽の見せ方だと思います。

7・取組からの成果（キャリア教育として）

「今日、少子高齢化社会の到来、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等が進む中、就職・進学を問わず、子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化しています。また、教育を取り巻く環境も大きく変化してきており、これら社会と教育の動向から若者をめぐる様々な課題が浮かび上がっています。一方、若者の勤労観、職業観の未成熟や、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力の不十分さなどについても各方面から指摘されている現状です。」また、「このような中で、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人、職業人として自立していくことができるようとする教育の推進が強く求められており、今、子どもたちには、将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力が求められています。この視点に立って日々の教育活動を展開することこそが、キャリア教育の実践の姿です。学校の特色や地域の実情を踏まえつつ、子どもたちの発達の段階にふさわしいキャリア教育をそれぞれの学校で推進・充実させましょう。」と文部科学省はキャリア教育の必要性と、その推進の充実が叫ばれています。

キャリア教育の目的は「学校から、社会へのスムーズな移行」であり、就職先・進学先を決めるためではなく、社会に適応することを支援することです。コミュニケーション能力を身につけることなど、汎用的な力をつけるためにも、専門的な教育の役割は大きいと言えるでしょう。

本校の取り組みも、多くの社会人と制作することを通じて、また社会人とふれあうことで制作に対する意欲や制作意図の変化、技術向上に伴う貪欲さなど、学校に来る楽しみを持たせることが可能になりました。

そして、教育が目指す「自律的に生きていけること」（大人になっても困らない力）を身につけさせることから、「社会へのつながり」を担っています。

8・おわりに（これからのおわりについて）

現在進行しているプロジェクトや計画されているものは以下の通りとなります。

- NHK BS プレミアム特集番組《千人の力～これが人間力（ヒューマンパワー）だ！（ひとりひとりの力は小さくても、千人集まれば何でもできる！）》の番組内で陶芸の森スタジオアーティストで来日している岡田 理（日本）・蕭 錦嫗（イギリス）・Marielle van den BERGH（オランダ）の3氏とともに、「絆」をテーマに制作をしていくドキュメント番組です。（来年2月放映）
- 「第2回信楽トリエンナーレ～信楽まちなか芸術祭～」（仮）が開催されます。計画では展示発表に加え、生徒が運営する店舗も考えています。
- 「社会人聴講生」「社会人講師招聘」「長浜盆梅展とのコラボレーション」は継続実施していきます。

◆ 参考文献「工藝志料」平凡社 黒川 真頼 著



●盆梅展展示風景